

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目

日本語の

出来事名詞とその構文

氏 名

久保田 一充

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、出来事名詞とその構文の体系的な記述を目指して、「VN をする」構文、出来事存在文、出来事予定文、「VN だ」構文の4種類の構文の観察を進めてきた。第1章と第2章では、出来事名詞自体の分析に重点を置き、その特徴を記述・整理した。第3章から第6章にかけては、問題の構文の分析に重点を置き、出来事名詞と構文の関係を明らかにした。以下に、本研究の成果をまとめる。

第1章においては、先行研究では詳細な記述の対象となることがほとんどなかったSENの特徴を、VNの特徴と比較対照しながら明らかにすることができた。第2章では、VNを取り上げて、VNの動詞形ではなく名詞形が選択される種々の動機を、VN名詞形の特徴との関係から記述・整理した。VN動詞形にはない、VN名詞形の特徴が積極的に利用・活用されて、この形式が選択されていることを論じた。VN名詞形の特徴のなかでも、特に「項の非明示が可能である」という特徴と「表示する対象の存在論的範疇に柔軟性がある」という特徴は、第3章以降で取り上げる構文との関わりのなかで重要な役割を果たすことが分かった。

第3章では、「VN をする」構文を取り上げた。先行研究では、「VN をする」構文には「VN する」構文には存在しない意味的な制約（主体性の制約・アスペクト制約）の記述・説明に重点が置かれていた。しかし、意味的な制約に注目するだけでは、「VN をする」構文が「VN する」構文に比べて単に使用範囲が限定的な構文であると特徴づけられてしまう。本研究は、「VN する」構文ではなく「VN をする」構文が選択される動機として、「VN をする」構文の〈行為対象の背景化〉という機能が挙げられる。さらに、第2章で述べた、名詞修飾資源利用の動機が働いて「VN をする」構文が選択されることもあり、この動機が強い場合には、「VN をする」構文にかかる意味的な制約が無効化されることを第2章での観察とあわせて確認できた。

第4章では、出来事存在文を取り上げた。出来事存在文の「ある」は、動態動詞だ

と特徴づけられることがあり、本研究でもこの「ある」の動態性を確認することができた。しかしその一方で、本研究ではさらに「ある」の動態動詞化が不完全であることを指摘した。出来事存在文 VN に関しては、その特徴を受動形／能動形の「VN する」構文と比較して明らかにすることができた。「VN をする」構文との関係に関しては、「VN をする」構文と同様に、項の背景化が出来事存在文 VN 選択の動機となることが確認できたが、出来事存在文 VN は、〈動作主の背景化〉も可能であるため、「VN をする」構文より高い程度で項の背景化の機能を発揮する。さらに、〈動作主の背景化〉が進んだ結果として〈出来事の自発〉を表すことが可能であり、その結果、出来事存在文 VN には〈義務予定〉を表すものが存在することが確認できた。

第 5 章では、出来事予定文を取り上げた。出来事予定文は、出来事存在文の表す出来事への参与者となる人名詞が付加されたものではなく、人名詞の指示対象の〈義務予定〉を表す構文であると特徴づけられた。さらに、構文カテゴリーとしては、一見、所有文の 1 種であるように思われるが、これが「象は鼻が長い」構文の変種であるとの特徴づけが適切であることが明らかにされた。

第 6 章では、「VN だ」構文を取り上げた。「VN だ」構文に関しては、先行研究において散発的にはあるが重要な指摘がなされてきた。しかし、そもそも「VN だ」構文は分類されてこなかったため、多くの記述はそれが妥当である範囲が不明であった。本研究は、「VN だ」構文に関して、属性・状態叙述型と出来事提示型の 2 類が区別されるべきであることを主張し、この 2 類型の特徴を記述した。そうすることによって、これまでに数々の研究者によってなされてきた指摘がどの下位類にとって当てはまるのかを整理することが可能となった。